

石神遺跡第12次調査現地説明会資料

平成5年11月13日
奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部
橋本義則

はじめに

昭和56年（1981）に始まった石神遺跡の発掘調査は、今回で12回目を迎えた。第9次調査までは旧飛鳥小学校の東側の水田を1筆ずつ調査し、一昨年度の第10次調査からは旧飛鳥小学校の敷地を対象として調査を行ってきた。今回の第12次調査はその3回目にあたる。

調査地は第4・5次調査区の西、第10・11次調査区をはさんで水落遺跡の北方に当たり、小字名は唐木である。調査は8月から開始し、現在も継続中である。調査面積は730㎡で、第1次調査からの調査面積は11,500㎡となる。遺跡の規模は南北160m以上、東西140m以上に及び、さらに北と西へ広がる。

従来の調査成果

石神遺跡では、これまで主に七世紀中頃から八世紀前半に及ぶ多数の遺構を検出し、それらはおおむねA期～D期の4期に分けられる。

A期（七世紀中頃：斉明朝） 飛鳥寺の寺域の北に東西大垣が作られ、その北方に石神遺跡、南方に水落遺跡が営まれる。石敷の広場や複雑に流れる石組溝、石敷をめぐらした井戸など多数の遺構があり、長廊状の建物で画された区画（東区画の規模は外周で東西24.7m、南北49.4m、西区画は東西42m以上、南北108m）が東西に並ぶ。

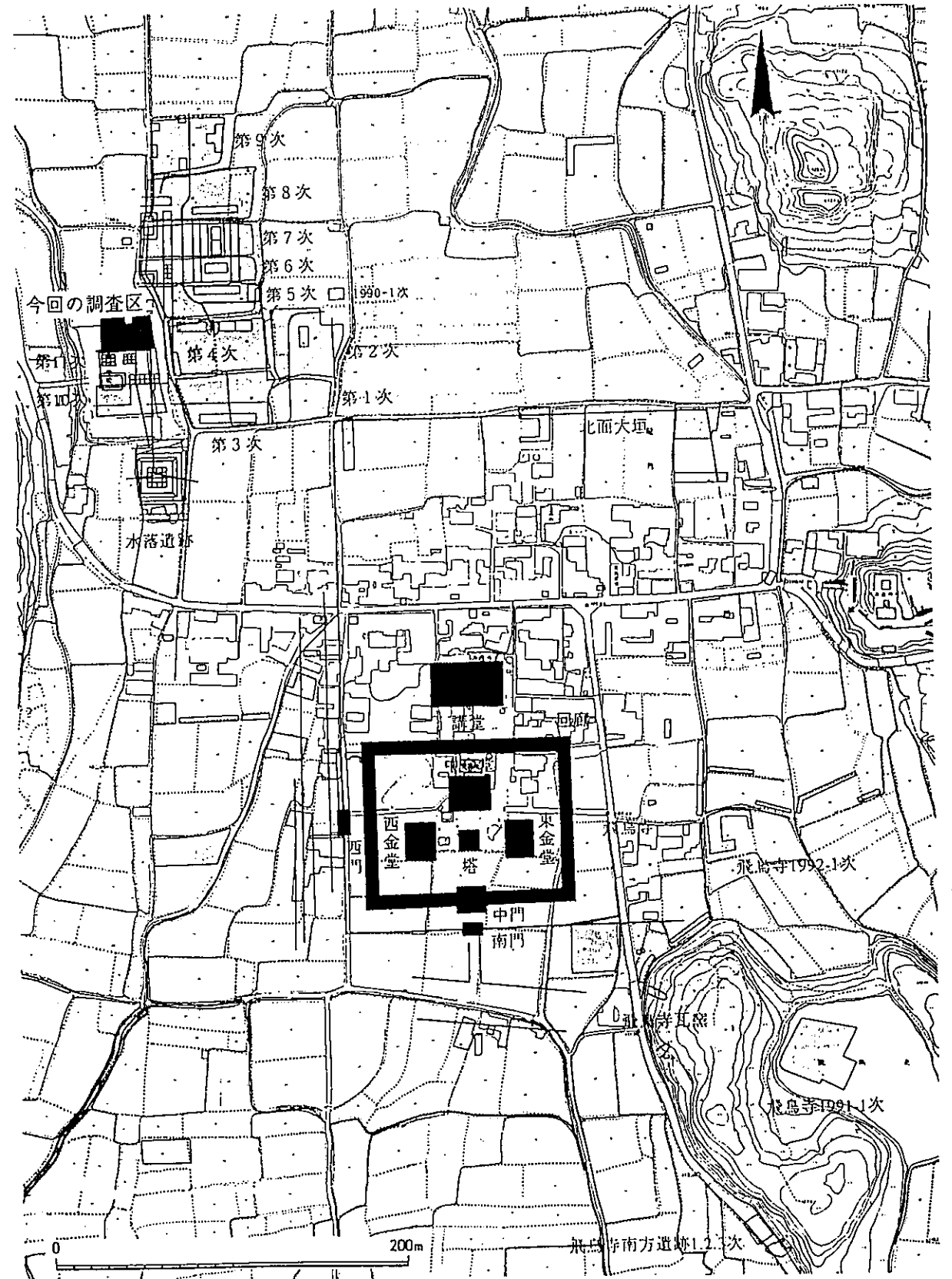
B期（七世紀後半：天武朝） A期の遺構が取り壊され、焼土混じりの土で整地を行ない、南北塀で画した多数の空間が作られ、その中に総柱建物や南北棟建物が配置される。

C期（七世紀末～八世紀初頭：藤原宮期） B期の遺構は全て取り壊され、整地を行なって掘立柱塀で囲まれた大規模な区画（南北長は72m、東西長は不明）が設けられ、区画の内外に比較的小規模な建物が建てられる。

D期（八世紀前半：奈良時代） C期の遺構は全て取り壊され小規模な建物・井戸が造られる。

今回の調査で発見した遺構

今回検出した主な遺構には、掘立柱建物7棟、掘立柱塀2条、溝5条、石



石神遺跡周辺調査位置図

敷4面・バラス敷2面があり、ほかに多数の土坑も検出した。これらは重複関係からA・B・Cの三期に分けられる。

A期：掘立柱建物5棟、掘立柱塀1条、溝3条、石敷4面、バラス敷2面がある。A期には、建物1、塀1、溝1～3、石敷1・2、バラス敷1・2からなる時期があり、さらに遡る時期の遺構として建物2・建物3・建物4・石敷3がある。前者の時期には、塀1を東の限りとしてその内部に大型の建物1を置き、その外周に石敷2やバラス敷1がめぐらされる。後者はさらに少なくとも3時期あり、建物2・石敷3→建物3→建物4の順で古くなる。

建物1 調査区西北部にある東西7間以上、南北3間の身舎の東西と南に庇を付けた東西棟建物で、石神遺跡と水落遺跡を南北に分ける東西大垣から40mほど北に当たり、建物の中心は西区画の東および南外周から36mの位置にある。身舎の柱掘形のみにも重複があることから、当初東西7間、南北3間の規模で建てられ、のち身舎が東西7間、南北3間で四面に庇のめぐらされたと思われる。柱間寸法は東西が2.5m等間、南北が2m等間、庇の出は2.4mで、柱の直径は30cmある。建て替え後の建物の柱抜き取り穴には多量の壁土と焼土が入る。

塀1 第11次調査区から延びてきた南北掘立柱塀で、建物1の東庇から5.4m東、石敷1の西縁の見切りから1.5m西に位置する。今回8間分を確認し、柱間は14間となったが、さらに北へ延びる。柱間寸法は2.5m等間で、低い基壇をもつ。一部の柱穴に掘形の重複が見られ、建物1とともに建て替えられた可能性がある。

溝1・2 水落遺跡から延びてくる木樋の抜き取り溝と木樋を据え付けるための掘形の溝で、溝1はさらに北方へ延びることが明らかとなった。水落遺跡の漏刻台（水時計）中心部から90m以上延びてきたことになる。また溝2は第11次調査区の北辺で検出し、西に曲がることが確認されていた。溝1の抜き取り溝は幅60cm、深さ20cmほどで、掘形は幅が1.2mで、底は抜き取り溝と同じ深さである。断面観察によれば、整地を行ったのち、その上面から溝を掘り、木樋を据え付けて埋め戻し、それを覆う整地を行い、その上に石を敷く（石敷2）。その後、石敷の上にバラスが敷かれる（バラス敷1）時期をへて、バラス敷1と石敷2を壊し溝を掘って木樋を抜き取っている。なお溝1の抜き取り溝には石・バラスと焼土が混ることから、木樋の抜き取りは周辺の建物が焼失したのちのことである。

溝3 バラス敷1を除去して検出した東西石組溝で、建物1の南庇から南4mにある。幅50cm、深さ30cmあり、石組は側石を1石据え、その上に石敷2の石を敷くだけで、底石はない。水は西に流れ、溝の東端は塀1の西基壇に取り付くものと思われる。焼土混じりのバラスによって埋め立てられている。

石敷1 塀1の東に広がる石敷で、第11次調査区から延びてきて、さらに北

へ続く。西縁には石を抜き取った南北溝が走り、塀1に対する見切りと考えられる。石敷の範囲は、東西が9.6m以上で、南北は36m以上にも及ぶ。

石敷2 建物1の南に広がる石敷で、第11次調査で南縁と東縁が検出されており、今回はその北縁を確認したことになる。北縁には見切りが設けられ、石敷は溝3にむかって緩く傾斜している。見切りの石が建物1の南庇の柱掘形にかぶさることから、建物1が建て替えられたのち、その外周に石敷がめぐらされたことになる。石敷の範囲は東西が20.6m以上で、南北は10mある。石は整地した上に敷かれているが、のち大半が抜き取られ、バラス敷1によって覆われることになる。

バラス敷1 石敷2を覆うバラス敷で、焼土を含み、厚さは10～20cmある。石敷2の北縁より30cm南にずらして東西に大きな河原石を並べ、バラス敷の見切りとする。同様のバラス敷は東方にある石敷1の上も覆っており、厚さは20cm内外あった。

建物7 バラス敷1を除去して検出した東西2間以上、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は東西が1.6m、南北が1.7m等間である。柱掘形は石敷2を破壊して掘られている。柱抜き取り穴は径10cmと細い。

建物2 東西2間、南北4間以上の南北棟建物で、柱間寸法は東西が2.55m等間、南北が2.1m等間である。柱抜き取り穴と掘形とを検出した整地土の層位が異なることから、柱を立てたのち床面を盛土して低い基壇を築いたと思われる。

石敷3 建物2の西に広がる石敷で、建物2の西辺に沿って南北に石を並べて見切りとし、石敷は西に向かって緩く傾斜している。見切りの石は1石がやや斜めに据えられるだけある。石敷の範囲は東西4.5m以上、南北8.5m以上である。石が建物2の掘形を覆っていることから、建物2の建築後石敷3が敷かれたことになる。

建物3 東西2間以上、南北3間の東西棟建物で、柱間寸法は南北が2.1m等間、東西が1.8m等間である。

建物4 南北に並ぶ柱穴を2個確認しただけで、規模や形式は不明である。2個の柱穴の間隔は2.1mである。

石敷4 建物1と重複して検出した石敷で、石敷1～3に比べて小さめの石を敷いている。北縁は東西方向にやや大きめの石を並べて見切りとし、北は一段低くして石を敷いている。建物1より古い。

A期に先行する可能性のある遺構に溝4・5がある。

溝4・5 とともに斜行する石組溝で、溝4は幅40cm、深さ20cmあり、石敷1の下へもぐってゆく。河原石を1段据えて側石とするが、底石はない。側石を据えた掘形が見つからず、石敷1以前の整地と同時に築かれたと考えられる。ともにおおきく振れ、その南延長部が直交する可能性がある。溝4の東北への延長上には、やや東にずれるが、第6次調査で検出した斜行石組溝がある。

検出状況や溝の構築方法に共通点が見られ、同時期の可能性がある。

B期：掘立柱建物1棟のみがある。

建物5 東西2間以上、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は東西が2.4m、南北が1.8m等間である。いずれの柱穴も焼土で埋められている。

C期：掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条があり、ともに北で西に2度振れる方位をもつ。このほかに多数検出した土坑のほとんどがこの時期に属する。

建物6 東西4間、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は東西が2.1m等間、南北が1.9m等間である。

塀2 調査区北端部を横断する東西塀で、建物6の北3mにある。C期の大規模な区画の南面を限る塀から北へ18mの位置に当る。柱穴は11間分を検出し、柱間寸法は2.4m等間である。東から2間目だけが3.6mと広い。

出土遺物

土器・瓦・金属製品・石製品・土製品がある。土器は多量の須恵器・土師器が出土した。須恵器には「岡本」と文字をヘラ書きしたものがある。瓦は四重弧紋軒平瓦1点、垂木先瓦1点などが出土しただけで、きわめて少ない。金属製品には、釘・斧・鎌・紡錘車・刀子・鏃・鏝などの鉄製品がある。石製品には、砥石・紡錘車・玉類・石鏃があり、ほかに凝灰岩・砂岩の切石、室生安山岩の板石が出土した。土製品には、円面硯・土馬・フイゴ羽口があり、建物1や溝3からは比較的多量の赤褐色に焼けた壁土が出土し、上面に白土を塗っている。

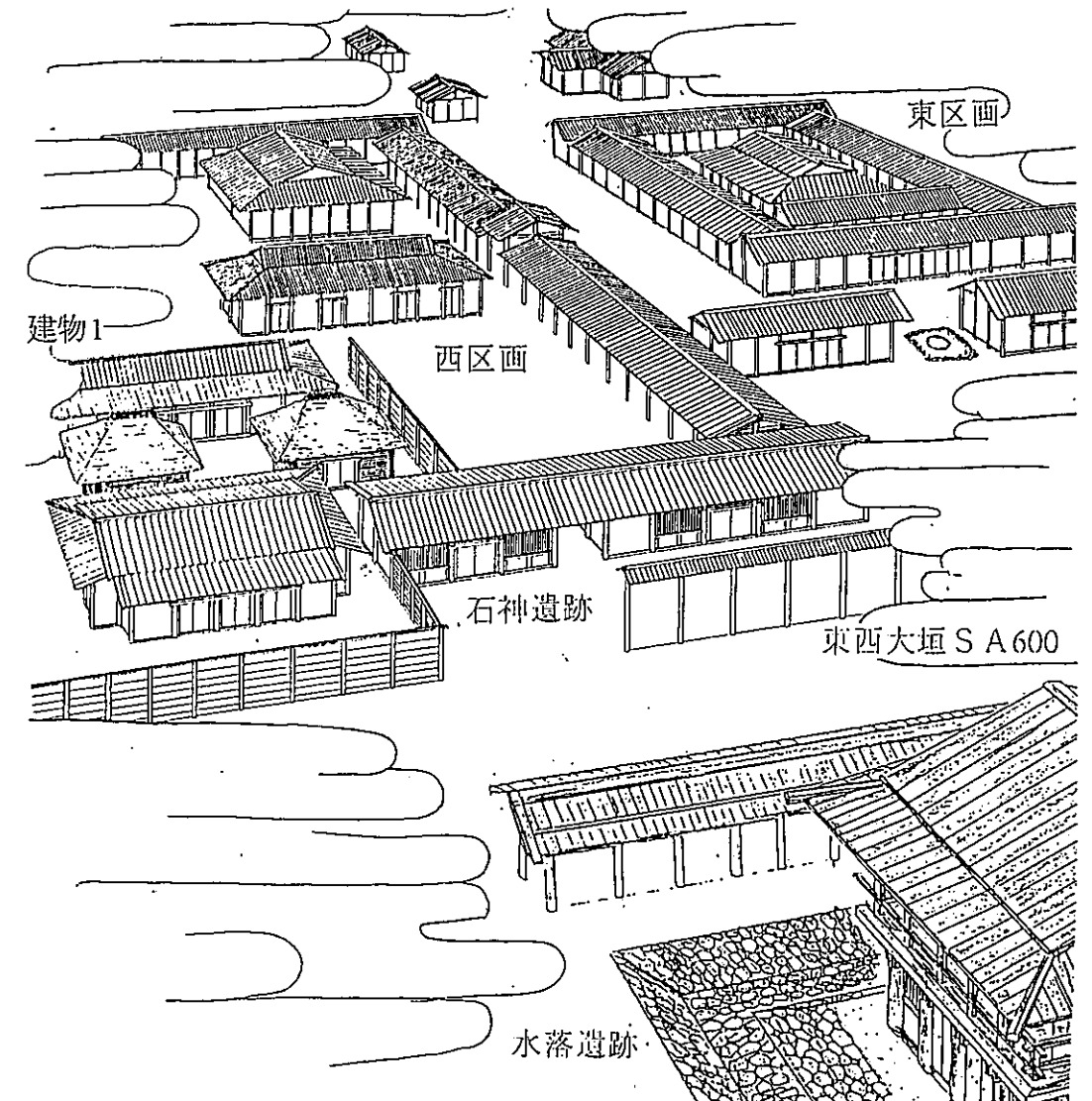
まとめ

今回は、第11次調査に引き続いてA期の西区画とC期の掘立柱で囲まれた区画のそれぞれ南部を調査したことになる。

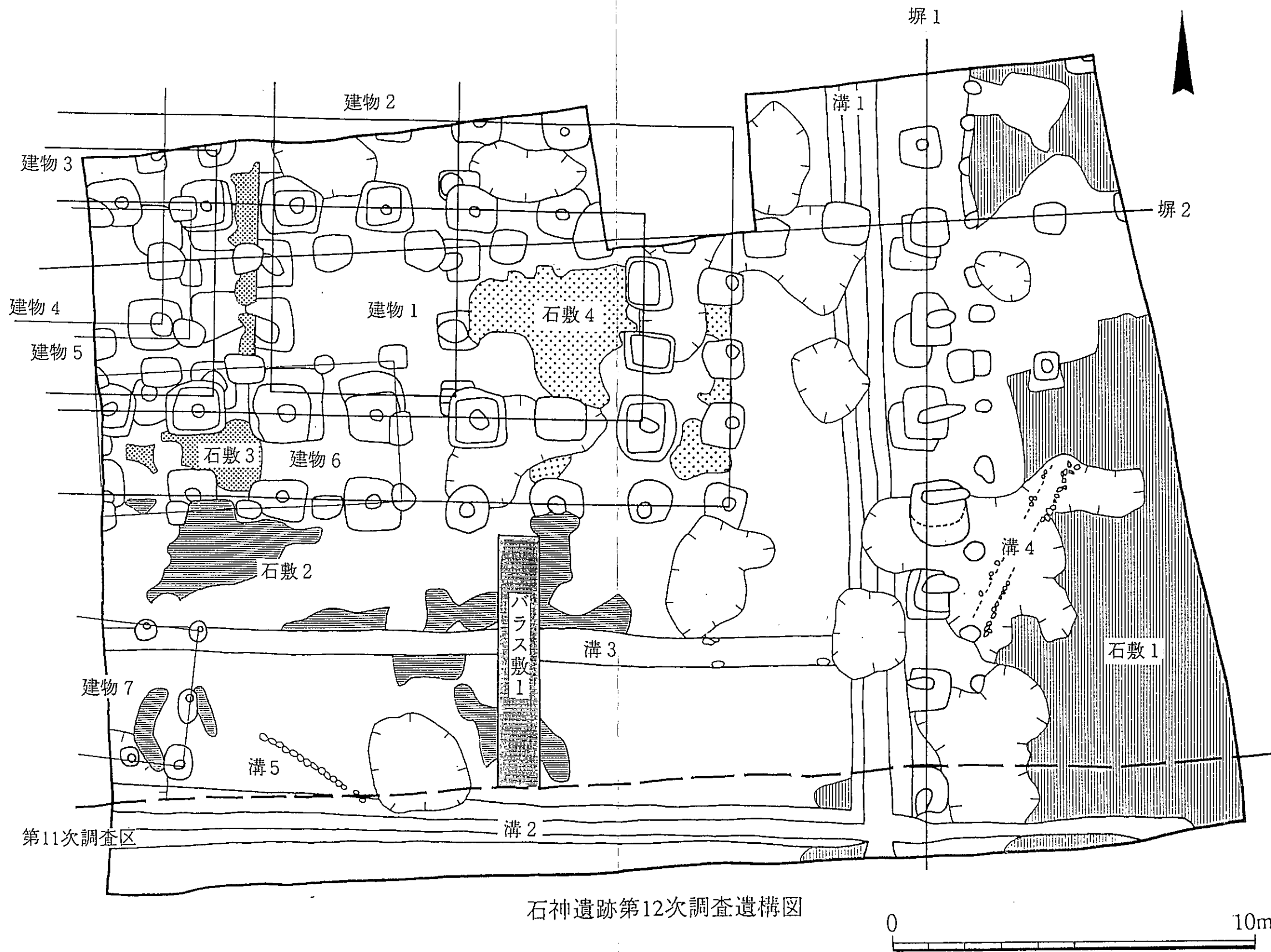
A期の西区画については、第10・11次調査で、外周の南北規模が108mで、その内部には周りに石を敷いた建物が建てられていることを確認し、東区画に比べて大規模でかつ中核的な施設であると推定した。今回の調査では、第10・11次調査の推定を積極的に裏付けるとともに新たな調査成果が得られた。第一に、四面に庇のめぐる大規模な建物1とその周囲に敷かれた石敷やバラス敷などを見つけ、石敷をとまなう建物が西区画の南部一帯に広がるのが明らかとなり、また建物1は石神遺跡で最大級の規模をもち、この区画の中心的建物の可能性があると考えられる。第二に、建物1の中心が区画の東及び南の外周から36mの位置にあり、またそれが第11次調査で検出した建物S B 1700の中軸線の北延長線上に当たることから、区画外周の東西規模が72mで、南北長の三分の二に相当し、建物1は区画の南限から

北へ三分の一の位置に建てられており、規格性の高い計画的な配置が採られていることがわかった。そして第三に、A期の中の遺構には少なくとも4期の重複があり、さらにそれに先行する時期の可能性もある遺構も存在することを確認した。

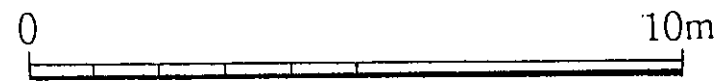
C期の遺構は建物6と塀2を検出するに止まったが、この時期の石神遺跡の構造を考える上で重要な成果を得た。すなわち、塀2の東端から2間目の柱間が広く、ここが掘立柱塀で画された区画の南面を限る掘立柱塀の柱間の広い部分の北延長上に位置することから、これが区画南面の中央に当たるとすると、東西規模が73.6mとなり、区画が東西73.6m、南北72mのほぼ正方形を呈すると推定できる。また塀2はちょうどこの区画の南から四分の一に位置することから、区画内は規格性をもった割り付けが行なわれていることも判明した。



石神遺跡復元図 (A期)

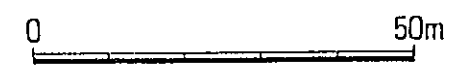
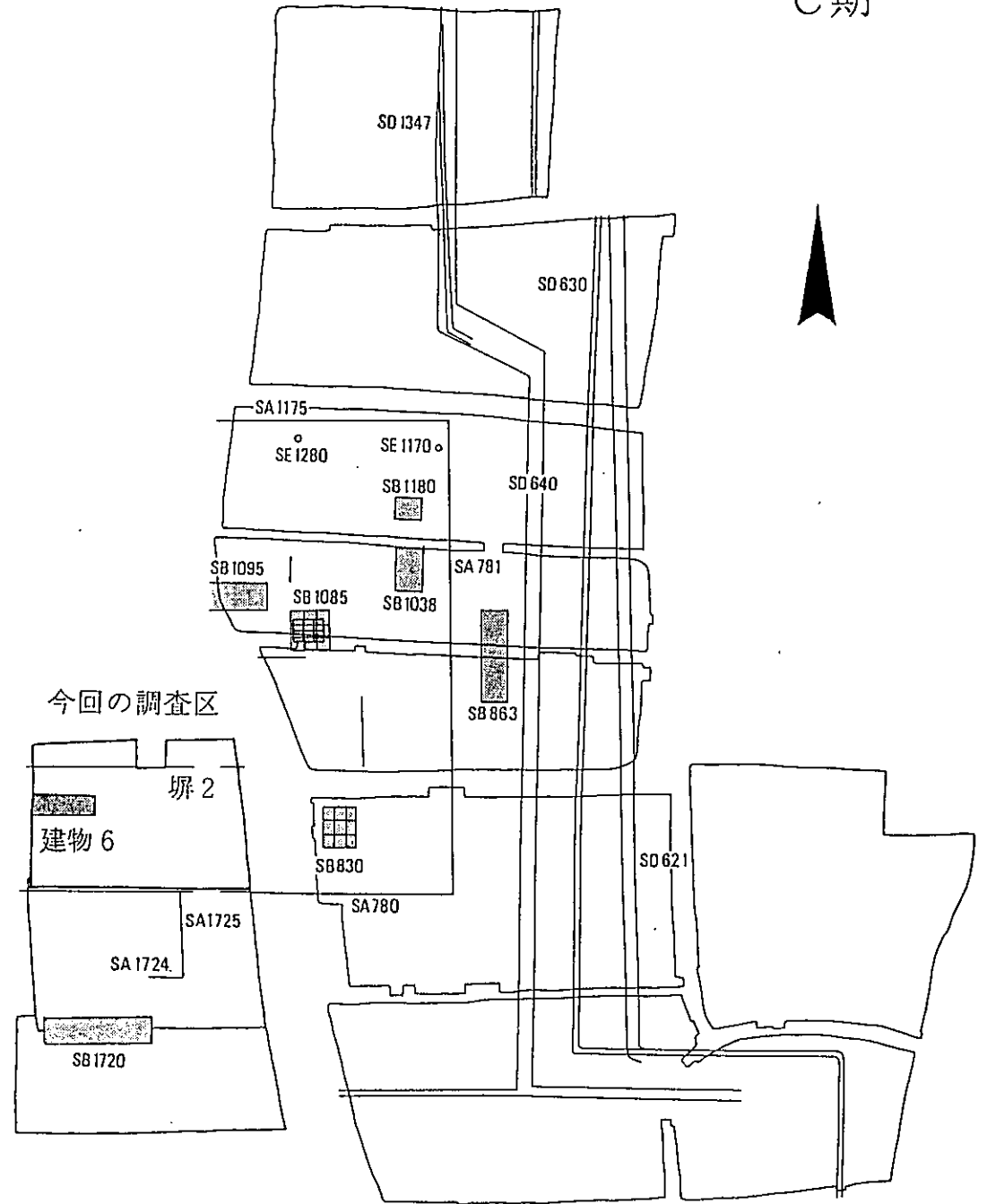
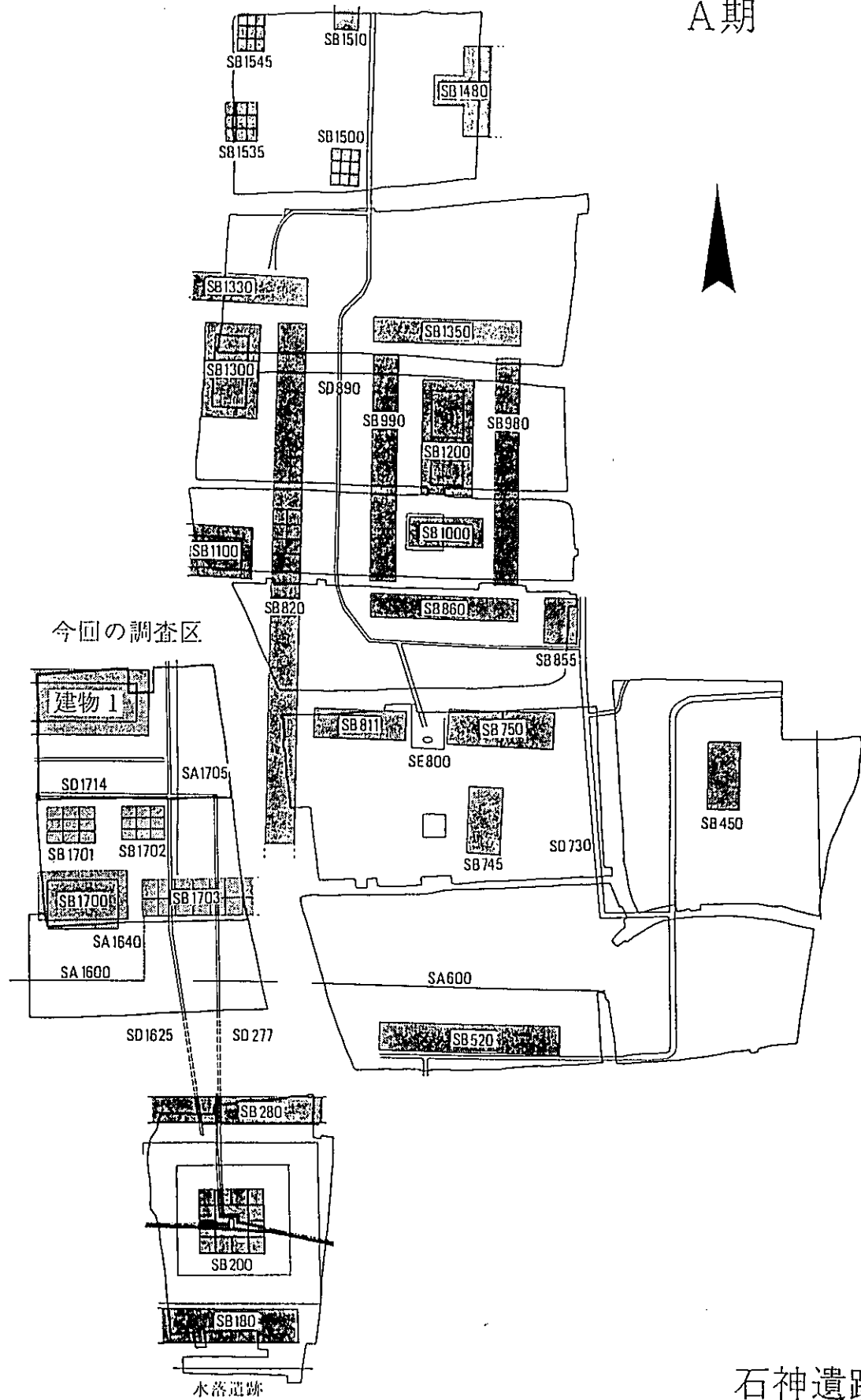


石神遺跡第12次調査遺構図



A期

C期



石神遺跡主要遺構配置図